

——千葉県市原市——

しら ふね
白 船 城 跡
——第 1 次——

1 9 8 7

有限会社 若 宮 不 動 産
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は房総半島東京湾岸の中央部に位置しております。原始古代より、房総半島第一の河川である養老川を中心にして、地理的、気候的にも恵まれているため、生活、文化の中心として栄えてきました。その足跡が埋蔵文化財として地下に豊富に眠っているのも本市の大きな特色の一つであり、全国的にも著名な遺跡がいくつもあります。その反面、京葉臨海工業地帯の中核としての発展もめざましく、開発に伴う埋蔵文化財の保存の問題も山積みされており、対策に苦慮しているところであります。そのため、やむを得ない場合において記録保存の処置を取り、開発と埋蔵文化財保護の調整をはかっております。

今回、ここに報告する白船城跡は市原市内において最も海岸に近い中・近世の城郭遺跡です。なお、今回の発掘調査により、築城以前の歴史が明らかになり、この地域の弥生時代、平安時代を理解する上で重要な資料が得られました。本書はこの調査成果をまとめたもので、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・滋養のために広く一般の方々にも活用されることを望んでやみません。

最後に若宮不動産の御協力と千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の御指導に厚くお礼申し上げます。

昭和62年 3月31日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本報告書は、千葉県市原市山木字城ノ内1,258-1番地ほかに所在する白船城跡の発掘調査報告書である。「白船城跡」については、今回の調査が当センターにおける第1次調査である。

2. 発掘調査は、有限会社若宮不動産との委託契約により、千葉県教育委員会並びに市原市教育委員会の指導を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。

3. 発掘調査並びに整理作業については、以下のとおりである。

発掘調査

面積 1,126.23m²

期間 昭和61年5月16日～6月25日

担当 石田広美

整理報告作業

期間 昭和61年7月15日～昭和62年3月31日

担当 石田広美

4. 本報告書の原稿執筆は、高橋康男他が行った。

5. 発掘調査及び整理報告作業においては、下記の機関、方々に御協力を賜った。ここに記して、深甚なる感謝の意を表します。

有限会社若宮不動産、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課、現場作業・整理作業に携わった調査補助員の方々

(財)市原市文化財センター組織表

昭和61年度(発掘調査・整理作業)

役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)	調査課	課長	清藤一順
副理事長	横濱辰夫(教育委員会教育指導部長)		主幹	石田広美
常務理事	岩見一民(専任)		主幹	山口直樹
理事	滝口 宏(早稲田大学名誉教授)		主任調査研究員	宮本敬一
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)		主任調査研究員	米田耕之助
理事	海上信久(姉崎神社宮司)		調査研究員	田中清美
理事	松崎良一(市企画部長)		調査研究員	浅利幸一
理事	斎藤栄亮(市総務部長)		調査研究員	大村 直
理事	地引希彦(市都市部長)		調査研究員	近藤 敏
理事	松下 隆(市総務部財政課長)		調査研究員	高橋康男
監事	斎藤崇雄(教育委員会総務課長)		調査研究員	田所 真
監事	白鳥一夫(市会計課長)		調査研究員	木對和紀

職員

庶務課	課長	田丸萬富	調査研究員(嘱託)	田中新史
	主事	大鐘光江	調査研究員(嘱託)	半田堅三
	事務員(嘱託)	秋田晴美	事務員(嘱託)	鈴木英啓
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ	事務員(嘱託)	高浦貞子
				長谷川いづみ

本文目次

序文

例言

財団法人市原市文化財センター組織表

第1章 序説	1
I 調査に至る経緯と経過	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	1
i 遺跡の立地	1
ii 歴史的環境	3
第2章 調査の成果	7
I 遺構	7
II 遺物	8
第3章 まとめ	13

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 白船城跡周辺地形図	4
第3図 白船城跡遺構全体図	5
第4図 白船城跡出土遺物実測図(1)	9
第5図 白船城跡出土遺物実測図(2)	10

図版目次

図版1 遺跡遠景・遺構全景
図版2 遺構全景 (S I 1～S I 4 ほか)
図版3 遺構全景 (S I 2・S I 3・S B 1 ほか)
図版4 遺構全景 (S I 5・S I 12・S I 13)
図版5 遺構全景 (S I 6・S I 7・S K 20・S K 23)
図版6 遺構出土遺物
図版7 遺構・グリッド出土遺物

表目次

第1表 白船城跡遺構一覧表	6
第2表 白船城跡出土土器観察表	11・12

第1章 序 説

I 調査に至る経緯と経過

今回報告する白船城跡の発掘調査に至る経緯並びに経過については次のとおりである。

昭和61年4月12日付けで、有限会社若宮不動産より市内山木字城ノ内1,258ほかの土地について宅地造成を行ないたい旨、千葉県教育委員会及び市原市教育委員会あてに埋蔵文化財の所在の有無の照会があった。

当該地は、遺跡地図では白船城に該当しており、現地を確認したところ曲輪状の明瞭な遺構が見られた。このことから当該地について「中近世城跡」が所在する旨事業者に回答した。

この結果を受け、文化財の取り扱いについて三者間で協議を行ったが、事業実施のやむなきを得、当該地については発掘調査による記録保存とすることで合意を得た。

調査は、財団法人市原市文化財センターに委託し、昭和61年5月16日に開始し、同6月25日をもって終了した。

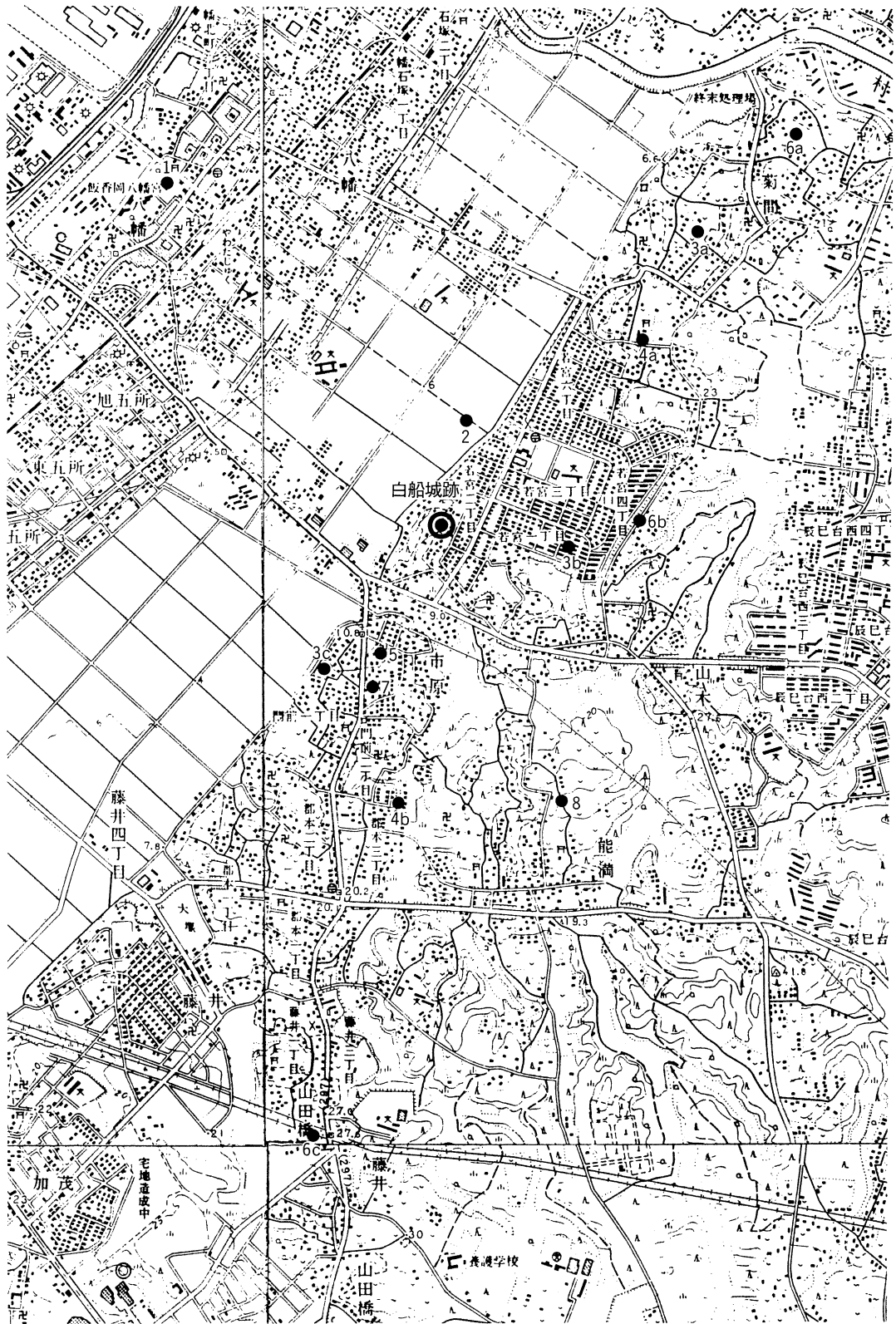
(文化課)

II 遺跡の立地と歴史的環境

i 遺跡の立地

白船城跡は、市原市の北部にあって内房線八幡宿駅の南東側1.5kmに位置し、白鳳年間の創建とされ、中世の作になる神輿が現存し、室町時代末期の建築様式を示す本殿を有する等古い歴史をもつ飯香岡八幡宮(1)や八幡の町並みが所在する標高3m前後の砂堆（ここでは仮に八幡砂堆と呼称する。以下同じ）とその後背低地を前面に望み、また現在は埋め立てにより後退した東京湾を遠望する独立台地上に位置する。なお、八幡砂堆の後背低地の台地側寄りの部分では条里制遺構(2)の存在が知られている。

台地は、八幡砂堆の後背低地に沿って北東～南西方向に細長く延びており、長さ約430m前後・最大幅約140m前後を測る。標高は、台地南西側が高く20.5m前後を測り、北東側はやや低く約19m前後を図る。また、台地の北西側は八幡砂堆の後背低地に面しており比較的急斜面を形成しているが、南東側は市原台地との間に小さな谷が入り込み緩やかな斜面を形成する。今回の調査地点は、台地の中央寄りの南東側に位置しており標高19～18m前後を測るが、この付近の地形は全体に南東側に向かって緩やかに傾斜している。



第1図 遺跡位置図 (1:25,000)

ii 歴史的環境

本遺跡周辺の歴史的環境についてみると、台地上には縄文時代から歴史時代或いは中世・近世に至るまでの数多くの遺跡が存在しており、集落跡（3-a, b, c）や貝塚（4-a, b）・寺院跡(5)・古墳（6-a, b, c）等が周知されている。また、八幡砂堆やその後背低地については必ずしも十分な調査がなされているとは言えないが、砂堆上における古墳の存在或いは后背低地において条里制遺構が遺存すること等、砂堆及びその後背低地にも早くから人々により生活の場として使用されていたことが窺え、主要な地域を形成していたであろうことと想われる。

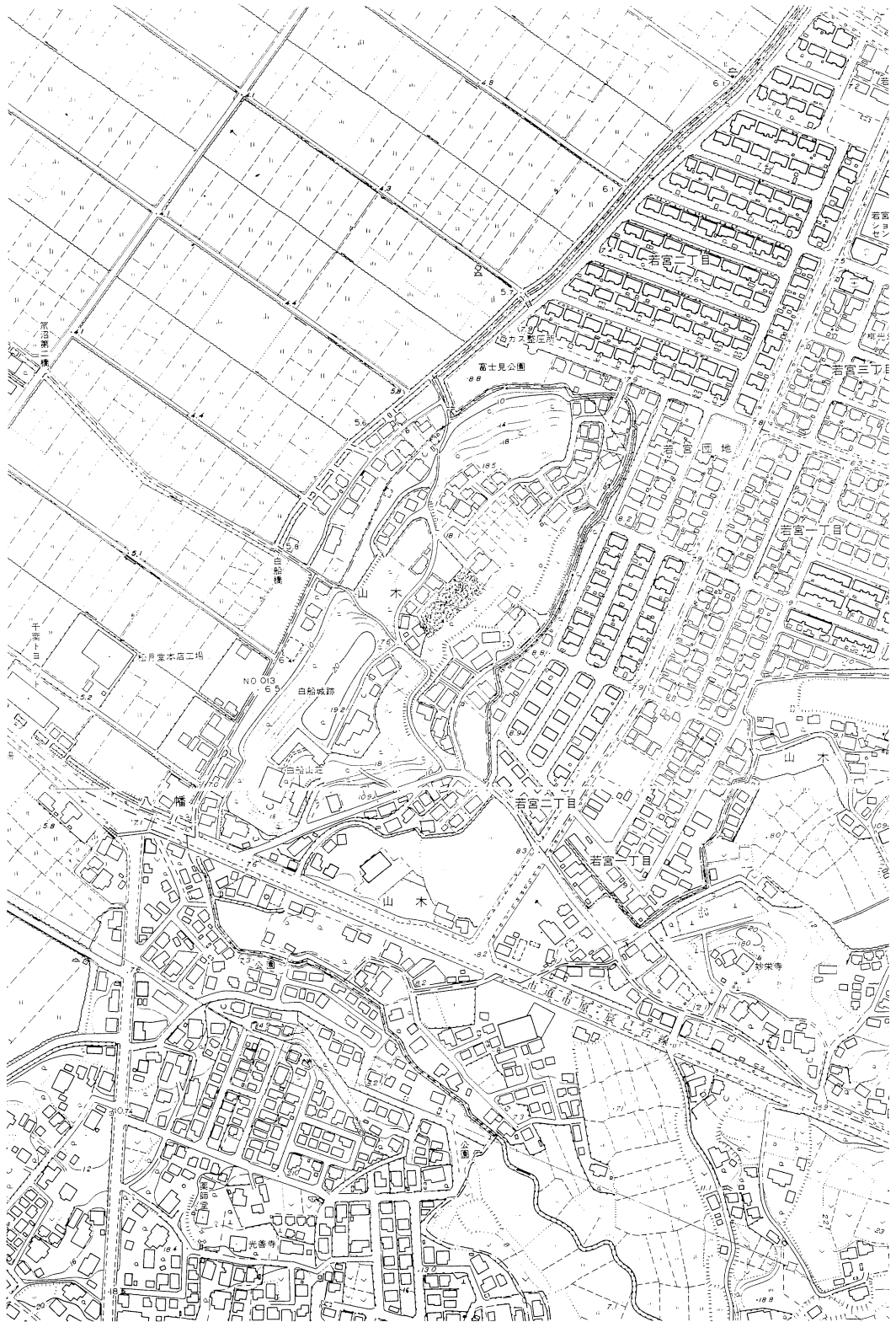
今回調査した地点についても、弥生時代や奈良・平安時代の住居跡のほか中世・近世に比定される遺構や遺物が出土しており、また調査地点は本報告の名称のとおり白船城跡の一角に位置している。

白船城跡については、戦国時代に構築されたものとされ、三本の堀切と四つの郭を設けた直線連郭式と考えられているが、現在は宅地開発等によって往時の地形を残す部分は少なくなっており、空堀や土塁の一部がかろうじて残存しているにすぎない（註1）。

白船城跡の周辺には戦国時代の構築になる城跡が幾つか存在しており、白船城跡とは谷を挟んでその南側の台地上には市原城跡(7)が位置している。城跡関係の遺構としては、土塁と堀切の一部が遺存している。また、南東側の台地上には能満城(8)が位置しており、土塁・空堀等が比較的良好に遺存している。これらの城跡は、相互に近接した位置に構築されており、この地域が重要な位置を占めていたことを物語っている。しかしながら、これらの城跡についての調査は十分とはいえず、不十分な点があり今後に残された課題は多い。

（註1）「白船城跡」『日本城郭大系6-千葉・神奈川-』（株）創史社 昭和55年2月
（周辺遺跡）：周辺には数多くの遺跡があるがその内の幾つかを例示する。

1	飯香岡八幡宮	（中世）	2	条里制推定地	奈良・平安時代
3 a	菊間遺跡群	縄文時代～古墳時代	3 b	若宮遺跡	古墳時代
3 c	郡本遺跡群	縄文時代～近世	4 a	袖ヶ台貝塚	縄文時代
4 b	門前貝塚	縄文時代	5	光善寺廃寺跡	奈良・平安時代
6 a	菊間古墳群	古墳時代	6 b	山木古墳群	古墳時代
6 c	稻荷台古墳群	古墳時代	7	市原城跡	中世
8	能満城跡	中世			



第2図 白船城跡周辺地形図 (1:5,000) (スクリーントーンは調査地点を示す)



第3図 白船城跡遺構全体図

第1表 白船城跡遺構一覧表

遺構番号	旧遺構番号	名称	形態	規模 (m)	壁高 (cm)	その他
S I 1	1号住居跡	住居跡	(推) 方形	NE-SW \times NW-SE 4.00 \times (3.34 + x)	16~	北西壁中央にカマド 壁周溝幅40~14cm深さ9.5cm柱穴はP ₁ ~P ₄ (深さP ₁ 58cm、P ₂ 48.5cm、P ₃ 55cm、P ₄ 55.7cm)
S I 2	2号住居跡	住居跡	(推) 方形	NE-SW \times NW-SE (3.36 + x) \times (1.88 + x)	11~	壁周溝幅20~10cm深さ5cm
S I 3	3号住居跡	住居跡	(推) 方形	NE-SW \times NW-SE 4.00 \times (1.12 + x)	20~	壁周溝幅28~20cm深さ12cm
S I 4	4号住居跡	住居跡	(推) 方形	NE-SW \times NW-SE (2.52 + x) \times (1.24 + x)	15.5~	壁周溝幅18cm深さ8cm
S I 5	5号住居跡	住居跡	(推) 長方形	NE-SW \times NW-SE 2.68 \times (2.44 + x)	37~	壁周溝幅24cm深さ8.5cm炭化材等出土
S I 6	} 6・7号住居跡	住居跡	(推) 小判形	E-W \times N-S (7.0 + x) \times (4.8 + x)	34.9~	壁周溝幅26cm深さ11cm
S I 7		住居跡	(推) 隅丸方形	E-W \times N-S (3.6 + x) \times (4.8 + x)	4~	壁周溝幅30cm深さ5.7cm S I 6より新しい。炉址は東寄りに位置し、新旧あり、柱穴はP ₁ ~P ₃ (深さP ₁ 76.1cmP ₂ 61.2cmP ₃ 62.5cm)
S I 8	8号住居跡	住居跡	不明	(床範囲E-W \times N-S) 2.92 \times 2.2	9~	
S I 9	9号住居跡	住居跡	不明	(床範囲NE-SW \times NE-SE) 4.72 \times 3.72	14.2~	柱穴はP ₁ ~P ₄ を想定(深さP ₁ 33.5cmP ₂ 28.9cmP ₃ 22.3cmP ₄ 43.7cm)
S I 10	10号住居跡	住居跡	(推) 方形	NW \times SW (1.56 + x) \times (1.28 + x)	1~	壁周溝幅22~14cm深さ4cm
S I 11	11号住居跡	住居跡	(推) 方形	NW-SE \times NE-SW (5.18 + x) \times (4.38 + x)	21.2~	
S I 12	12号住居跡	住居跡	(推) 方形	NW-SE \times NW-SE 5.7 \times (4.38 + x)	12.1~	
S I 13	13号住居跡	住居跡	(推) 方形	NW-SE \times NW-SE (6.16 + x) \times (2.16 + x)	2.7~	壁周溝幅20~15cm深さ14.8~6.4cm S I 12より新しい。柱穴はP ₁ 、P ₂ (深さP ₁ 53.4cmP ₂ 22cm)
S I 14		住居跡	不明	(床範囲NW \times SW) 1.8 \times 1.88	9~	
S I 15		住居跡	(推) 方形	(床範囲NW-SE \times NE-SW) (4.3 + x) \times (0.76 + x)		
S I 16		住居跡	不明	(壁周溝長 ^{SW}) 1.5		壁周溝幅14cm深さ2cm
S B 1		掘立柱跡		2間(3.3m) \times x		深さP ₁ 65.5cmP ₂ 65cmP ₃ 48cm
S K 2	2号土壇	土壇	隅丸長方形	2.22 \times 1.3	44.5~26.5	
S K 3	3号土壇	土壇	不整隅丸方形	2.16 \times 1.62	61.6~26.2	北西側が一段浅くなる
S K 4	4号土壇	土壇	隅丸長方形	1.64 \times 1.1	14.6~11.0	
S K 5	5号土壇	土壇	長方形	1.6 \times 0.68	17.5~7.9	
S K 6	6号土壇	土壇	(推) 隅丸長方形	(1.46 + x) \times 0.38	60.7~56.8	
S K 7	7号土壇	土壇	(推) 隅丸方形	(0.88 + x) \times 1.72	61.0~53.0	
S K 8	8号土壇	土壇	隅丸長方形	1.9 \times 0.92	30.3~25.0	
S K 9	9号土壇	土壇	隅丸長方形	1.92 \times 0.5	83.4~53.8	
S K 10	10号土壇	土壇	(推) 方形	(0.6 + x) \times (0.7 + x)	83	
S K 11	11号土壇	土壇	隅丸長方形	1.92 \times 1.36	38	
S K 12	12号土壇	土壇	不整隅丸方形	1.92 \times 1.76	91.7~54	
S K 13	13号土壇	土壇	(推) 隅丸方形	(0.68 + x) \times 1.6	41~32.7	
S K 20	20号土壇	土壇	隅丸長方形	1.7 \times 1.12	58	
S K 21	21号土壇	土壇	隅丸長方形	1.92 \times 1.44	111.6	
S K 23	23号土壇	土壇	隅丸長方形	2.32 \times 1.16	37~33	
1号地下式土壇	地下式土壇	地下式土壇	(入口部) 楕円形 (玄室部) 方形	入口部1.94 \times 1.56 玄室部2.29 \times 1.74	入口部~玄室床面 237.9	入口部は、大小五段の階段状を呈す。階段最下段と玄室床面との比高差67cmを測る

第2章 調査の成果

I 遺構

本遺跡の発掘調査においては、弥生時代から中近世に至るまでの数多くの遺構とこれら遺構にともなう遺物が検出されている。遺構は重複が著しいこともあり、また地形の関係によるものか或いは城跡構築時もしくは後世の削平によるものか、かなりの破壊を受けておりプランの全容は明らかでないものが多い。

弥生時代では3軒の住居跡が検出されている。調査区中央南東際において重複した住居跡2軒が、さらに調査区東側際では炉跡の痕跡かと考えられる焼土跡が3ヶ所検出されており、住居跡の存在が窺える。遺構のプランとしては完存する遺構がなく全体を窺い得ないが、調査区中央南東際のS I 6が胴張り隅丸方形を、これを掘り込んで構築されたS I 7が隅丸方形を呈するようである。出土遺物が少なく時期の判断は困難であるが、遺構プランから見てもS I 6とS I 7の間には時期的な差があると思われる。

奈良・平安時代では住居跡が少なくとも10軒が、この他掘立柱建物跡1棟及び土壇等が検出されている。掘立柱建物跡や住居跡の多くは調査区の中央より南西側に分布しており、北東側に分布する一群とは区別できそうであり、遺構の削平が著しいため一概には言えないが、現状では北東側に分布する一群の規模が南西側に分布する一群より大きいようである。これに対して、南西側に分布する住居跡群はやや小規模であり、このうちS I 4或いはS I 5等はその住居跡に比べても小規模である。また、調査区中央より南西側に分布する住居跡群においても重複するものがあることから、北東側の住居跡群を含めて幾つかの時期に細分されるようであるが、各遺構とも削平が著しくプランや重複関係が不分明であり、且つ遺物の出土が僅かの場合が多くS I 4やS I 5等を除き時期の判断は困難である。

中・近世ではピット・土壇・地下式土壇や溝状遺構等が調査区全面に亘って検出されているが、遺構に伴う遺物の出土が少なく時期の判断は困難である。今回の調査地点は、本丸とは空堀を挟んでその北東側に位置しており、おそらく二の丸の一角を占める物であろうが、直接的に城跡に関係すると考えられる遺構については明かにすることはできなかった。また、今回調査した地点は削平を受けているが、この地形整形はおそらく白船城築城に際して行われたものではないかと思われる。

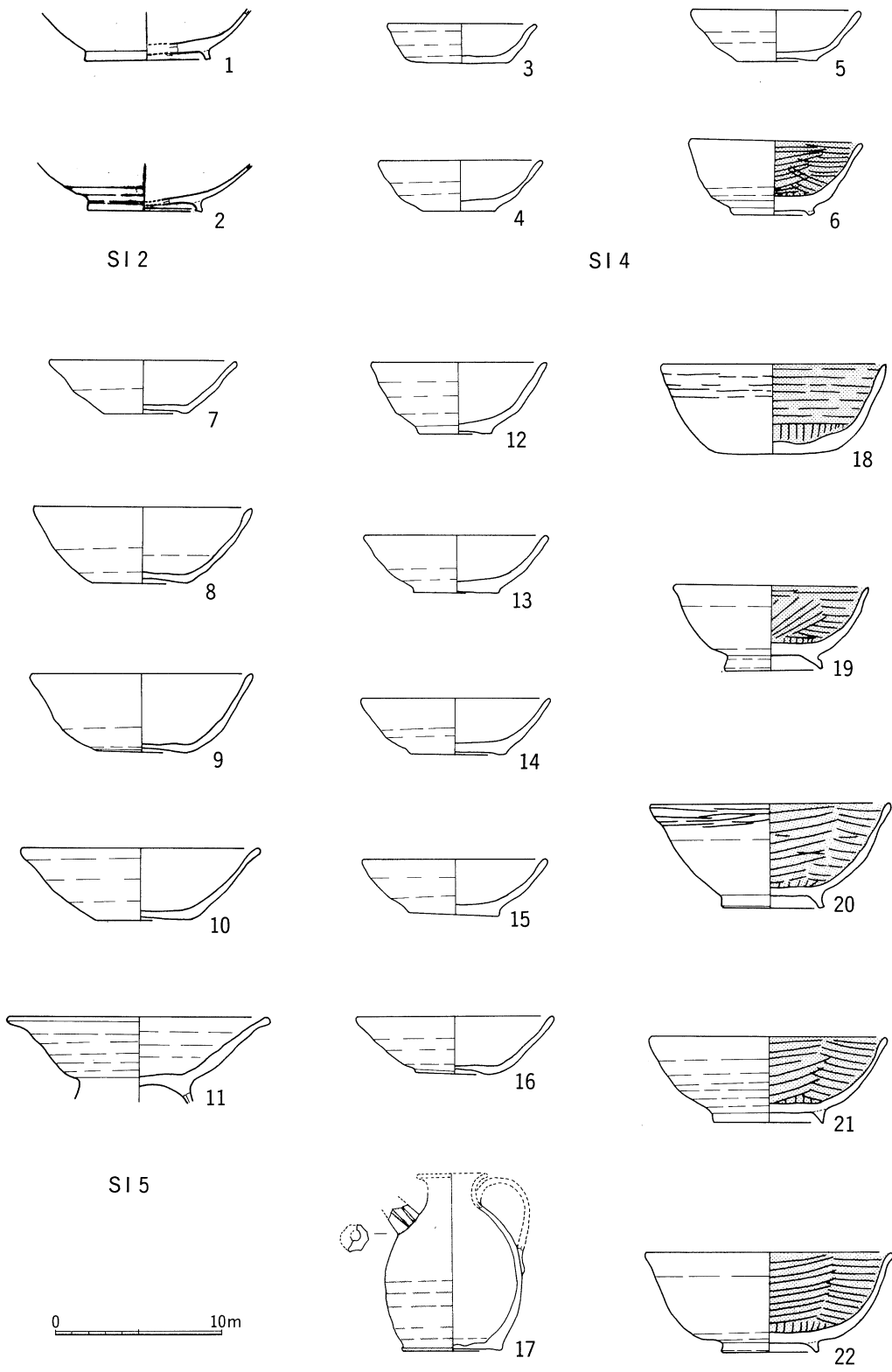
II 遺物

今回の調査で出土した遺物は、図示した通りである。個別の特徴等については、観察表を参照いただくこととして、ここでは、総体的な状況について触れることとしたい。

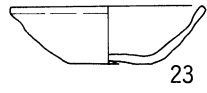
出土した遺物は、緑釉陶器・灰釉陶器といった施釉陶器、土師器に大別される。土師器では内黒のものを含む。また、中世陶器へつながるものとして羽釜も認められる。なお、図示し得なかったが、輸入陶磁である、青磁の破片も出土しており、この青磁については同安窯の製品と考えられる（笹生 衛氏御教示）。

ここで、比較的まとまった資料の出土したS I 5の資料についてみておく。器種構成としては土師器の無台坏については、口径13～14cmのもの（8～10）と11cm前後のもの（7・13～16）の2種の存在が認められそうであり、内黒のものについては、高台をもち体部のやや内湾するもの（19～22）が主体的であるといえる。いわゆる足高高台をもつものも認められるが量的には客体的存在と思われる。無台の坏に関しては、技法が確認されたものについては、いずれも回転糸切り後無調整である。このような器種構成・技法上の特徴をもつ土器群については、袖ヶ浦町永吉台遺跡群（財団法人 君津郡市文化財センター『千葉県袖ヶ浦町永吉台遺跡群』1985）の西寺原地区出土の土器群の第3群の特徴にほぼ一致するものであり、当該土器群を主体とする時期については同地区の土器編年上は第Ⅳ期とされ、実年代としては10世紀第4四半期があたえられているところである。本遺跡周辺においては類似する様相をもつ土器群の実体についてはいまだに明らかになっていない部分が多く、したがって、ここでは西寺原地区の編年観を援用し、この白船城跡S I 5の資料に関して10世紀第4四半期という年代を与えることとしたい。他の遺構出土の土師器についてもこのS I 5に近似する時期に位置づけておきたい。

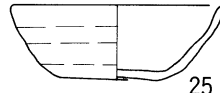
記述が前後することになるが、緑釉陶器については、9世紀代の所産と考えられ、上記S I 5出土の一括資料に与えた年代との乖離を認めざるを得ない。おそらく、集落の営まれた時期に断絶があったことの反映であろう。現段階においては、緑釉陶器の出土遺跡は上総国分二寺稻荷台遺跡といった、一般集落とは異なった性格の遺跡からの出土にほぼ限られており、本遺跡からの出土の意味するところについては、十分な吟味が必要であろう。本遺跡の南方に位置する光善寺廃寺、さらに上総国府推定地等との関連のなかで捉える必要も出てくるのではないかと考えられるが、実態の不明な点が多く、今後の周辺の資料の蓄積をまって、再度検討することとしたい。



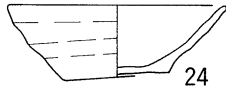
第 4 図 白船城跡出土遺物実測図 (1)



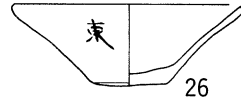
23



25

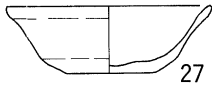


24

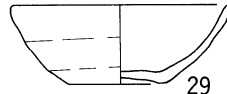


26

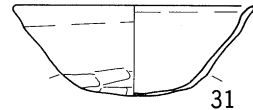
SK12



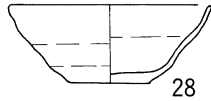
27



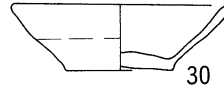
29



31

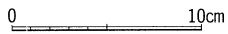


28



30

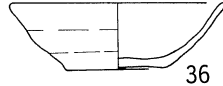
SK13



グリッド出土遺物 (32~41:8G、42:7G)



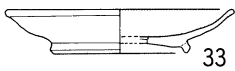
32



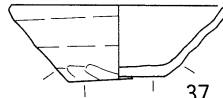
36



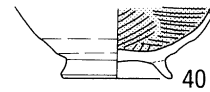
39



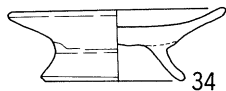
33



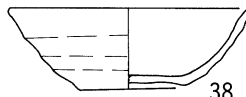
37



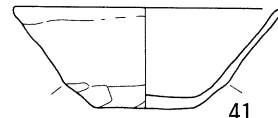
40



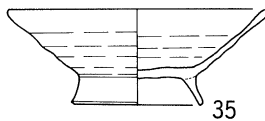
34



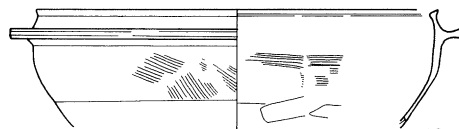
38



41



35



42

第5図 白船城跡出土遺物実測図(2)

第2表 白船城跡出土土器観察表

番号	出土遺構	種類	器種	技法の特徴	法量(推定)			胎土	色調	備考	写真図版番号
					器高	口径	底径				
1	S I 2	緑釉陶器	碗	施釉はハケ塗り、内面でいねいなミガキ			(7.4)	精良	緑黄	高台より内側は、釉の発色薄く、断面は橙色、外側は、発色濃く断面暗灰色	
2	S I 2	緑釉陶器	碗	施釉はハケ塗り、内面でいねいなミガキ			(6.7)	精良	緑黄	内面に三又トチンの痕跡、1に比べ光沢弱い	
3	S I 4	土師器	小皿	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	2.3	(9.0)	5.8	赤色粒・白色粒含む	淡赤褐		
4	S I 4	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.0	9.9	4.2	白色粒子含む	明褐～褐灰		図版61
5	S I 4	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.0	10.2	4.9		明褐～淡褐		図版62
6	S I 4	土師器	杯	体部内面でいねいなミガキ、高台内側に回転糸切りの痕跡	4.5	(10.4)	4.7	赤色粒子・白色粒子含む	淡赤褐	内黒	図版63
7	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.1	11.2	4.9	砂粒多い	暗褐	糸切り筋目幅広(2~3本/cm)	
8	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	4.5	13.0	5.6			底部立ち上がり～口線中スス付着	
9	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	4.8	(13.0)	5.6	小礫含む	淡赤褐	外面底部全面～体部約1/4中段までスス付着	図版64
10	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	4.3	14.2	5.8	砂粒・白色粒子多い	暗褐～黒褐	器表は全面的にザラザラである	図版65
11	S I 5	土師器	台付杯	体部内外面共ヨコナデ	5.0 +α	15.9		小礫含む	橙	足高高台(?)	
12	S I 5	土師器	杯	不明瞭	4.3	(10.4)	4.3	赤色粒子含む	橙	器表磨耗著しい	
13	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.5	11.0	5.0	白色粒子含む	橙		図版66
14	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.4	11.4	5.5	白色粒子含む	黒褐		図版67
15	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.4	11.1	5.5	白色粒子含む	橙～黒褐		図版68
16	S I 5	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.4	(12.0)	4.5	小礫含む	淡赤褐		図版69
17	S I 5	灰釉陶器	手付水注	外面全面に施釉、内面底部にも発釉あり、底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ(?)			6.0	黒色粒子含む	灰	注口部の面取りは6面(?)、内面に剝落部分あり	図版610
18	S I 5	土師器	杯	内面ミガキ、外面ヨコナデののちミガキ	5.3	13.5	7.5	白色粒子含む	橙～黒褐	内黒、外面荒れており、整形等不明瞭	図版611
19	S I 5	土師器	台付杯	内面ミガキ、外面ヨコナデ底部回転ヘラケズリ	5.1	10.6	5.6	赤色粒子含む	橙～黒褐	内黒	図版612
20	S I 5	土師器	台付杯	内面ミガキ、外面ヨコナデ	6.3	14.4	6.2	小礫含む	橙～黒褐	内黒(内黒処理残存部分少ない)、外面スス、油煙付着	図版613
21	S I 5	土師器	台付杯	内面ミガキ、外面ヨコナデ、底部回転糸切り	5.2	14.2	6.6	小礫含む	褐～黒褐	内黒、ミガキは5分割、内面黒色は薄くなっている。高台内側にヘラによる線刻	図版614
22	S I 5	土師器	台付杯	内面ミガキ、外面ヨコナデ、底部回転糸切り	6.0	14.8	6.0	赤色粒子・黒色粒子含む	褐～黒褐	内黒、ミガキは6分割、焼成やや甘い	図版715
23	S K 12	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.0	10.1	4.5	赤色粒子含む	淡褐		図版716
24	S K 12	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部静止糸切り無調整	3.8	11.6	5.7	赤色粒子含む	淡褐～橙		図版717
25	S K 12	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.8	(11.0)	5.2	赤色粒子含む	橙	体部外面に粘土紐の痕跡残存	図版718
26	S K 12	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ	4.3	12.1	4.0	チャート小粒含む	淡褐	「東」墨書、器表はザラザラしている	図版719
27	S K 13	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転糸切り無調整	3.4	(10.8)	4.6	赤色粒子・黒色粒子含む	淡褐		

28	S K13	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転系切り無調整	4.1	(10.8)	4.4	比較的精良	橙	体部内外面に粘土紐の痕跡	図版 7 20
29	S K13	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転系切り無調整	4.1	11.4	5.1	赤色粒子含む	淡褐	器表凹凸顕著	図版 7 21
30	S K13	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転系切り無調整	3.5	(11.4)	5.6	赤色粒子含む	暗褐～黒褐		図版 7 21
31	S K13	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部および底部外周手持ちヘラケズリ	4.8	12.5	5.8	白色粒子含む	橙	器壁比較的薄い	図版 7 23
32	8 G	緑釉陶器	皿	施釉は全面高台接地部内側を面取り、内外面共ヨコナデ			7.9	精良	緑	内面中央寄に圏線 2 本	
33	8 G	灰釉陶器	皿	施釉は内面外周部のみ、内外面共にヨコナデ、底部に回転系切りの痕跡			7.2		灰		
34	8 G	土師器	台付皿	内外面共にヨコナデ、台と皿の接合やや雑	3.7	11.2	7.2	赤色粒子含む	淡褐	焼成やや甘い	図版 7 24
35	8 G	土師器	台付杯	内外面共にヨコナデ	5.0	(13.6)	6.6	赤色粒子含む	淡褐	高台内側中心付近やや下に凸	
36	8 G	土師器	杯	体部内外面共にヨコナデ、底部回転系切り無調整	3.6	(11.0)	5.3	赤色粒子含む	淡褐		図版 7 25
37	8 G	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部回転系切り手持ちヘラケズリ	3.9	11.5	5.1	白色粒子含む	褐～暗褐	器表はややザラザラしている	図版 7 26
38	8 G	土師器	杯	体部内外面共にヨコナデ、底部回転系切り無調整	4.2	12.7	6.0	白色粒子含む	橙		図版 7 27
39	8 G	土師器	小皿	体部内外面共ヨコナデ、底部回転系切り無調整	2.2	9.0	6.0	赤色粒子多い	淡褐		図版 7 28
40	8 G	土師器	台付杯	内面ミガキ、外面ヨコナデ			5.5	赤色粒子含む	淡褐～暗褐	内黒	
41	8 G	土師器	杯	体部内外面共ヨコナデ、底部全面および底部外周ヘラケズリ	5.3	14.0	5.2	赤色粒子、小礫含む	淡褐～暗褐	体部外面にモミガラ痕	
42	7 G	土師器	羽釜	外面ヨコ方向のナデ一部ハケ残存、内面ヨコ方向のハケのちヨコ方向のナデ		(20.7)		精良	淡褐～黒褐	器壁薄い	

第3章 ま と め

今回調査した地点は、戦国時代に構築されたと考えられる白船城跡の二の丸の一角を占めているものと考えられるが、調査の結果では城郭に関する遺構は明確にはできなかった。中世から近世にかけての遺構としては、多数のピット群・土壇や地下式土壇があるが時期を窺える遺物は少なく、ピット群にしても掘立柱建物跡のものか不明である。調査した地点は、全体に南東側に緩やかに傾斜しており北西側と南東側との比高差は約0.4～0.8m前後を測る。このような地形整形はおそらく城郭構築時に行われたものと考えられるが、断定するにはいたらない。今回の調査地点が白船城跡の二の丸においてどのような性格を有するものかについては、周辺は既に宅地化が進行しており旧地形を窺える部分が少ないが、全体の地形を復元すると共に調査成果を合わせて検討する必要があるだろう。

写 真 图 版



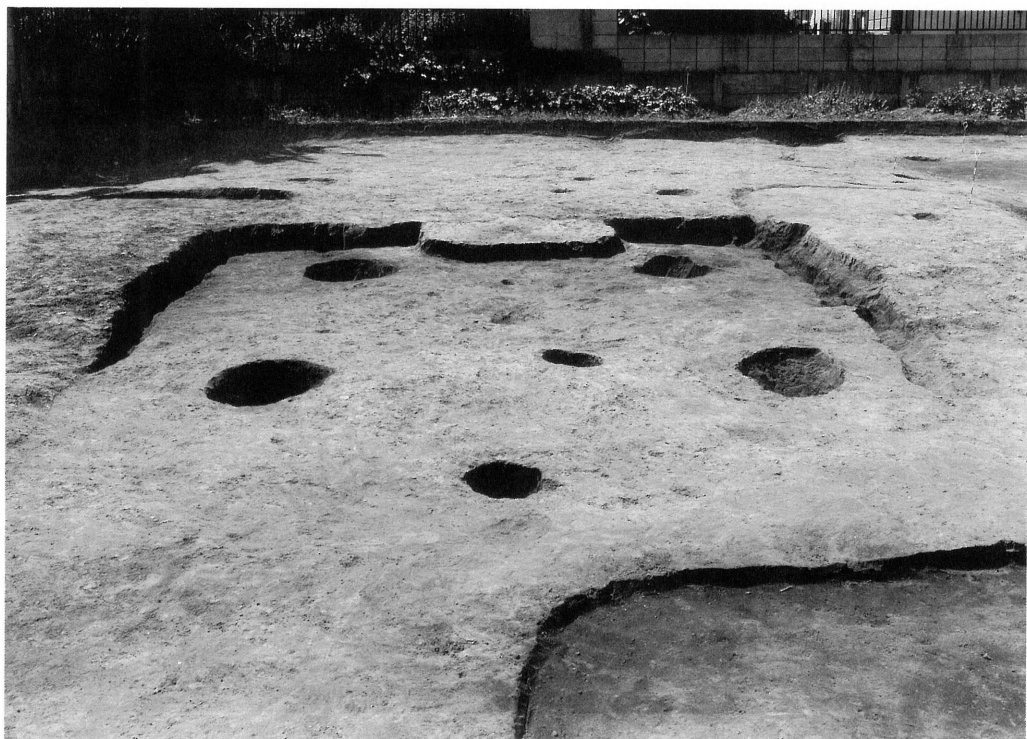
1. 遺跡遠景 (正面台地上)



2. 遺構全景 (土壇、溝、ピット)



1. 遺構全景 (S12、S13、S14、土壇、ピットほか)



2. 遺構全景 (S11)



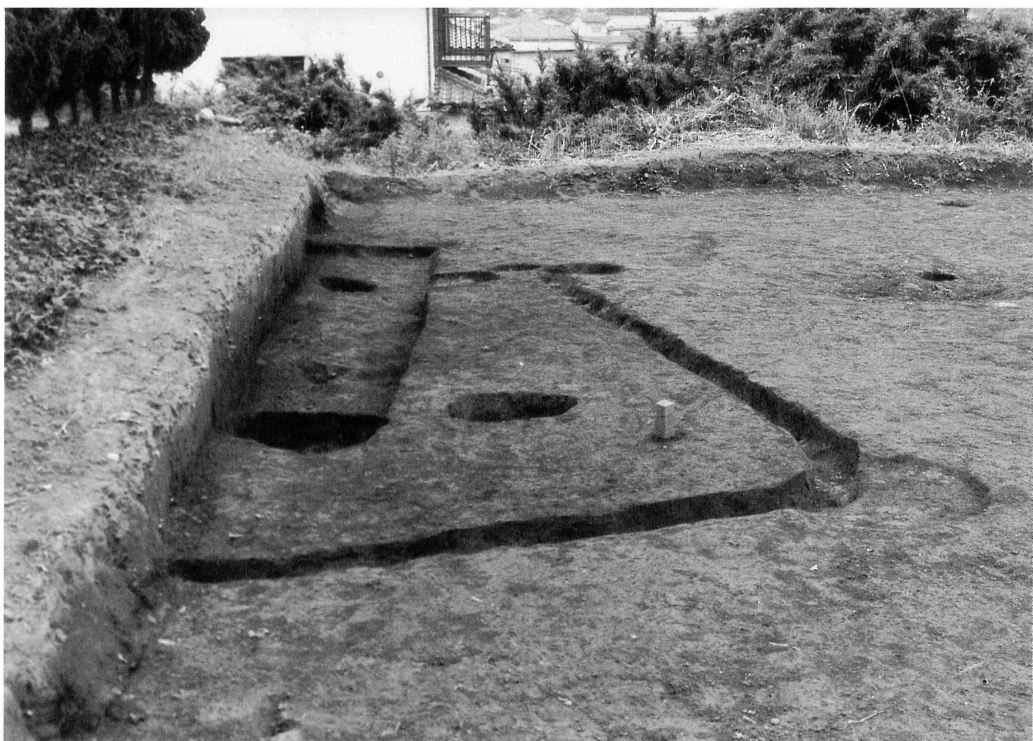
1. 遺構全景 (前 S12、奥 S13・SBI 等)



2. 遺構全景 (土壇、住居跡(左上 S19)、ピット)



1. 遺構遺物出土状況 (SI5)



2. 遺構全景 (右 SI13、左 SI12)



1. 遺構全景 (外 SI6、内 SI7)



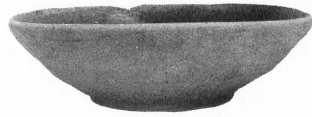
2. 遺構全景 (前 SK23、奥左 SK20)

図版 6

遺構出土遺物(カッコ内は挿図中番号)



1 (4)



8 (15)



2 (5)



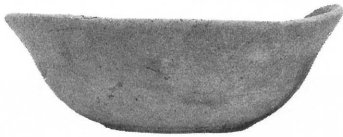
9 (16)



3 (6)



10 (17)



4 (9)



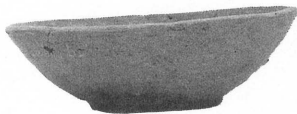
11 (18)



5 (10)



12 (19)



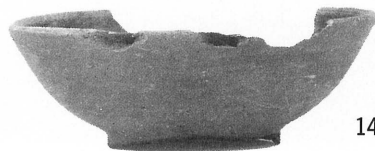
6 (13)



13 (20)



7 (14)



14 (21)



15 (22)



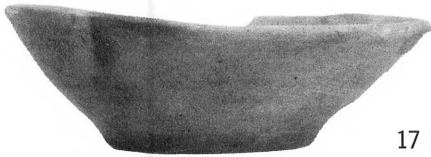
22 (30)



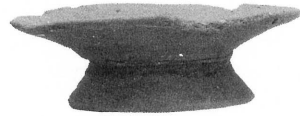
16 (23)



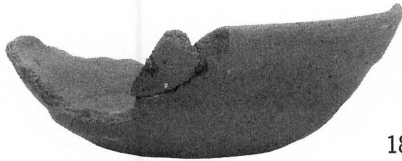
23 (31)



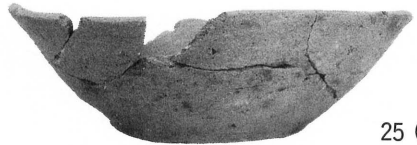
17 (24)



24 (34)



18 (25)



25 (36)



19 (26)



26 (37)



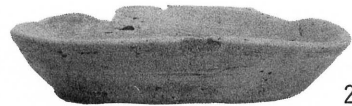
20 (28)



27 (38)



21 (29)



28 (39)

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第15集

白船城跡 -第1次-

昭和62年 3月26日 印刷

昭和62年 3月30日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 有限会社 若宮不動産
財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市馬立817番地
TEL 0436 (95) 2755

印 刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 0473 (24) 5977